



「文脈」をたどる

ここのところ、引用という安易な？通信が重なったので、ここでちょっと専門的な話をして権威を取り戻しておこう（笑）。

ところで、いよいよ志望校を決め始めて、その過去問などにも取り組み始めていることだろう。その際、時間も意識して解答するように心がけることは大切だが、同時に、一度解答し終わったらそれで終わりというのではなく、分からなかったところや自信がないところを自分なりに再確認し、その上で答え合わせをするとよい。早く答えを見たい気持ちは分かるが、一段階置くことによって、自分の解答を客観的に見られるようになることも大切なのである。

ちなみに、これは添削指導を受ける際も有効で、自分の書いた解答だけを渡して添削をお願いするのではなく、決めた時間で解答を終えた後、もう一度自分の答えを見直しながら、「この問題ではここが自信がない」とか、「Aの表現を使ってまとめるのかBを使うのか迷った」とか、「解答欄が狭いのでCの要素を入れなかったが大丈夫か？」といった思考の過程や質問事項を振り返ってメモしておく、君たち自身も自分の解答を客観化することができるし、添削する我々も君たちの要求に応えた的確な添削が可能となって効果的である。ぜひ、励行してほしい。

*

…と、導入の話が長くなってしまったが、例えば古文の問題を解く際は、いつも言うように「主語の追求」がポイントで、だから接続助詞の「を・に・ば・逆接」に注目するように繰り返しているわけだ。

ところで、主語転換のポイントになる接続

助詞の「を・に」であるが、これは①順接、②逆接、③単接の三種類の働きをする（…というか、単に「くっつける」という働きがあるだけのものに、我々が勝手に論理を与えているだけなのかもしれないが）。この①～③の区別は「文脈」によることになる。

漢文でいうと、「而」という助字にも順接と逆接の両方があることを思い出すだろう。これまた「文脈」で判断することになる。

で、問題。「彼は旅行に行かなかった、而、彼は映画に行った。」の場合、「而」は順接だろうか、逆接だろうか???

このことについて『漢文法基礎』（加地伸行、講談社学術文庫）で面白い解説がなされている。それによると、この場合の「而」は「論理」の問題というよりも「心理」の問題であって、積極的なら「しかし」になるし（旅行には行かなかったが映画に行った！）、消極的なら「そして」になる（旅行は大変だから映画でも…）というのである。へ～え。

面白い解説ではあるが、心理を読み取るとなると、ますます「文脈」が大切になる。

私は、古文にしる漢文にしる「文脈」をたどる以外に読む方法はない（主語の追求はその代表）と思うわけだが、「文脈」を読み取るためには、「をにば逆接」で区切ったり、文法や係り受け（漢文なら助字や構文）の知識がなくてはならない。しかし、文法や係り受けを正確に適応するためには「文脈」が必要になる。その「文脈」を読み取るには……えっ！繰り返しじゃないですか！みたいな世界にはまってしまうのである。かくして古典は奥深いのであったよ（なりけり）。ははは。